

16. ^{67}Ga シンチグラフィによる皮膚サルコイドーシスの評価

清水 正司 蔭山 昌成 金澤 貴
 亀田 圭介 豊嶋心一郎 富澤 岳人
 渡辺 直人 瀬戸 光 (富山医薬大・放)

今回、われわれは下腿の浮腫で発見された稀なサルコイドーシスの一例を経験し、その質的診断と局在部位診断に ^{67}Ga シンチグラフィ、特に皮膚病変の評価に SPECT が有用であった一例を報告する。症例は 55 歳、男性で、主訴は両側下腿の浮腫と右鼠径部リンパ節腫大であった。当初はリンパ浮腫が疑われたが、 ^{67}Ga シンチグラフィにて、耳下腺、肺門部、肺野、右鼠径部および両側下肢に集積増加が認められ、容易にサルコイドーシスと診断することができた。さらに、下肢の SPECT にて皮膚および皮下組織にびまん性に集積増加を示していることを確認することができ、両側下腿の浮腫の原因が皮膚サルコイドーシスであることがわかった。

17. 神経芽腫における ^{123}I -MIBG シンチグラフィの検討

——マスキング陽性例を中心に——

矢野 正幸 (静岡県立こども病院・放核)
 堀越 泰雄 (同・血液腫瘍)

〔目的〕 神経芽腫マスキング陽性例に対する初回 ^{123}I -MIBG (以下 MIBG と略) シンチグラフィの撮像開始時期と病巣検出能の関係を検討した。

〔対象〕 過去四年間に MIBG シンチを施行したマス陽性患児 21 例のうち、MIBG 静注後 6 時間と 24 時間の 2 回撮像が可能であった 14 例である。

〔結果〕 MIBG 静注後 6 時間と 24 時間における腫瘍集積パターンを、Type I から Type IV の四群に分類が可能であった。MIBG 静注 6 時間で腫瘍への集積が明らかでない群 (Type II) が存在した。一方、24 時間後像では全例に腫瘍の描出を認めた。

〔総括〕 MIBG による神経芽腫の診断に、24 時間後のシンチグラムは不可欠と考えた。

18. 4,9-diaza-3,3,10,10-tetramethyldodecan-2,11-dione bisoxime の腫瘍親和性の検討 (第一報)

平松 孝司 横山 邦彦 林 承赫
 手賀 晴信 絹谷 清剛 道岸 隆敏
 利波 紀久 (金沢大・核)

4,9-diaza-3,3,10,10-tetramethyldodecan-2,11-dione bisoxime (HL91) は、従来の低酸素組織親和性トレーサとは異なり、nitroimidazole 基を持たず、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 標識体である。HL91 が腫瘍の診断薬として使えるか否かを、in vitro cell binding assay を用いて、 ^{201}Tl と比較検討した。その結果、低酸素状態では ^{201}Tl の細胞結合率が低下したが、HL91 では一定の結合であった。よって、相対的に HL91 の細胞への結合率が上昇し、細胞の代謝の低下による取り込みの低下を相殺している可能性が示された。

19. 脳腫瘍における ^{201}Tl -SPECT と重ね合わせ画像の検討

王 暁明 元村有紀子 綾部浩一郎
 東 光太郎 大口 学 谷口 充
 利波 久雄 山本 達 (金沢医大・放)
 高田 久 飯塚 秀明 (同・脳外)
 北 洋一 掛下 一雄 (同・中放部)

目的： ^{201}Tl -SPECT と MRI の重ね合わせ画像の精度に影響する因子および重ね合わせ画像の臨床的有用性を明らかにする。対象と方法：術前 ^{201}Tl -SPECT と造影 MRI を施行した脳腫瘍症例 39 例について Dr. View ソフトで ^{201}Tl -SPECT と MRI の重ね合わせ画像を作成した。結果：位置合わせの基準の選択および正中矢状面の体軸の対称性は、画像の精度に影響する因子として重要である。重ね合わせ画像によって 28.2% の症例は情報が増えた。結論： ^{201}Tl -SPECT と MRI の重ね合わせは、surface marker を使わなくても可能である。また、 ^{201}Tl -SPECT と MRI の重ね合わせ画像は脳腫瘍の検出能と診断精度を向上させ、臨床上非常に有用である。